

セーリングパラダイス沖縄のレース事情



今年5月、久々のロングレース「沖縄・東海レース」開催で注目を集めた沖縄は、国内最南端のセーリングエリアです。燦々と降り注ぐ太陽のもと、海を渡る心地よい風と戯れながら、快適なセーリングを楽しめる季節が長く、ハワイに匹敵する「セーリングパラダイス」の一つといってもいいでしょう。沖縄の外洋レース事情を紹介します。

「海を航る」レース

沖縄のレースは本島を中心として、年間5〜6回開催されています。

マリンスポーツシーズンそのものは4月〜11月までと長めですが、「どうせなら天候の安定するいい時期にやりたい」という訳か、レースは夏至南風（カーチーバー）と呼ばれる南南西の季節風が吹く6〜9月に集中しています。

ベースとなるのは那覇市から国道58号線を車で30分ほど北上したところにある宜野湾港マリーナ。マリーナの沖合をスタート地点として30〜40マイル先に点在する島々を目指す「オフショアレース」が主流です。

世界でも有数の透明度を誇る慶良間諸島の海が目前に広がっているという点もありませんが、インシヨアレースはまず実施されません。海に点在する島や岩礁がいわばマークがわり。「海を航る（わたる）」という表現がふさわしく、クルージング気分も味わえるのが沖縄のレースの魅力といえるでしょう。

ポリシーは「全員参加で楽しむ」

土曜日に島までのスピードを競い、



海と空、この青さがたまらない沖縄の魅力。座間味レースより

か、他艇はどう動くか…… 距離が長いだけに、チーム全体の腕や判断が試される場面は多く、それだけに逆転のチャンスの芽も多く潜んでいます。過去のレースでも小型艇が大型艇をひっくり返したケースもあり、毎回勝負の面白さを感じさせてくれます。

常に盛り上がるパーティー

フィニッシュラインを切り、港に舳をとった後は、参加メンバーたちの気分はクルージングモードへ。

早く着いた艇は島内観光や透明度の高いエメラルドグリーンの海で泳いだり。それぞれが思い思いの時間を過ごした後、夕刻からはお待ちかねのパーティーとなります。

沖縄でのパーティーがうれしいのは、何といっても帰りの心配をする必要がなく、そのまま床につけること。心置きなく、存分に至福の時間を楽しめます。

緯度が西に位置する分、日没は遅め。徐々に迫る夕暮れを眺めつつ南国の心地よい風を受けながら、つつい杯が進みます。

主催のホテルや島の実行委員会のほからいで、島の特産品がふるまわれたり、郷土芸能のエイサーやバンド出演

着いたらみんなパティ。翌日曜日は泊地での海水浴やトロリングなどクルージングを楽しみながら帰ってくる、というのが基本スタイル。

ギンギンのレーサーだけでなく、「参加することに意義あり」のクルージング派もそれぞれが「楽しめる」レースとなっています。

レース運営でも、船足が遅い艇でも「パティ」に間に合うようにスタート時間が設定されているなど、「みんなが参加しやすい」配慮がされています。

そんなわけで、レースにはスピード志向の大型艇だけでなく、30ftクラスのクルージング艇やカタマラン艇も数多く参加。自分の艇の都合がつかなければ、知り合いの艇に便乗ということもあります。

さらに多くの艇では「島に行こうよ」とゲストも呼びます。レース主体の艇であっても、ゲストを乗せて走っているのは、ごくごく普通の光景です。

週末の2日間は、みんなで沖繩の海を堪能する。「みんなで参加して盛り上がる」これが沖繩のレースポリシーです。

距離が長い分、巻き返しのチャンスも

もちろん「競う」という点での魅力もたっぷりあります。

速い艇であっても、3〜4時間はかかるレースが大半です。その間の天候の変化に加え、島、珊瑚礁の間を流れる海流や風の影響もあり、レースコンディションは常に変化に富んでいます。

レース委員会も岸ぎりぎりにマークを打ったり、沖合の小島を回航させたり、あらゆる風向や海面で競えるよう、工夫を凝らしたコースを設定。

どのコースをたどるか、いつセールチェンジをするか、風や潮はどう変化する

本島での主要レースの概要（2010年）

「久米島レース」

5月29日（土）開催。宜野湾～久米島。55マイル。

今年で20回目を迎えた伝統のレース。5月末の沖繩は梅雨の真っただ中。前線の動きによって、風も海況も天気も変わります。変化をどう読み、セッティングするか、各チームの腕の見せどころです。

「チービシー一周レース」

7月18日（日）開催。宜野湾～チービシー一周。23マイル。

那覇の沖合約8マイルにある3つの珊瑚礁の島を巡るレース。沖繩エコカーニバルの一環として開催されます。

「座間味レース」

7月26日（土）開催。宜野湾～座間味。28マイル。

今年で33回を迎えます。手頃な距離が人気で、例年30艇近い参加があります。座間味海峡の上りレグが勝負どころ。島の影響を受ける風と波を制した艇が栄冠をつかみます。

座間味港フェリー乗り場前の広場で深まる夕焼けの中でのパーティはいつも盛り上がります。例年6月の梅雨明け直後にサバニレースと併催でしたが、今年は7月最終週末の開催となりました。

「伊江島レース」

9月18日（土）開催。宜野湾～伊江島。30マイル。

今年初開催。本部半島の沖合5マイルに浮かぶ「夕日とロマンのフラワーアイランド」。残波岬沖やフィニッシュ直前の伊江水道の潮流の影響をどう読むかが鍵。

「本島一周レース」

10月9日（土）開催。宜野湾～本部沖～辺戸岬～辺野古沖～与勝半島沖～久高島～喜屋武岬～那覇空港沖～宜野湾。150マイル。

今年久しぶりに復活。もちろんオーバーナイトです。

詳細は県ヨット連盟にお問い合わせ下さい。



同じく座間味レースの1シーン

海の青さばかりではない。夕暮れのみしさも多くの沖繩セーラーを魅了する。久米島レースのパーティより



など、楽しみがいっぱい。成績発表では優勝チームにはトロフィーとともに、副賞で泡盛の瓶が贈られます。

となると、トロフィーで勝利の祝杯を回し飲み、という光景が始まり、成績を肴にさらに酒を酌み交わし、さらに祭りにはぎやかに。興が乗れば、やがてどこからともなく、指笛が飛び交い、カチャーシーへ。やがて二次会へと繰り出すのはおなじみの光景。こうしてレースの夜は更けていきます。

島の活性化の一翼になつヨットレース

こうしたレースが楽しめるのも、受け入れ側の島の方たちのホスピタリティがあつてこそ。泊地や宿泊の手配からパティ運営まで、役場や商工会、観光協会の方々からさまざまなサポートをいただいています。

逆に離島の方々にとっては、ヨットレースは島の活性化につながる起爆剤の一つ。

私たちセーラーの側も、子どもたちの体験乗船など、島興しに一役買うお手伝いをしています。久米島レースや座間味レースなどは、20年以上続いており、すっかり島の風物詩として定着しています。

「継続は力なり」今後も、このようなレースが継続、発展していきけるよう、関係づくりを大切にしていきたいと思っています。

沖繩のレースの魅力が口づけてに伝わって、最近では内地からの参加、回航や沖繩に艇を置くセーラーも増えてきています。（私もその1人ですが）多くの方に沖繩のレースを体験していただくのは大歓迎です。

時間ができたら、ぜひ沖繩の海を訪れてください。（レポート／伊藤烈、写真／大濱当吾）